

平成18年度 第3回 芦屋市文化行政推進懇話会 会議要旨

日 時	平成18年 8月22日(火) 15:00~17:00
場 所	北館4階 教育委員会室
出席者	<p>委員長 中川幾郎 委員 井垣貴子・植田勝博・鴛海一吉・神棒眞一・久保田靖子 佐田高一・辻本勇・広瀬忠子・山田崇雄</p> <p>山市市長 近藤教育委員長・藤原教育長・麻木教育委員・三栖管理部長・ 車谷学校教育部長・三好美術博物館副館長</p> <p>事務局 松本社会教育部長・川崎社会教育部次長・白川市民センター長・ 長岡文化行政推進担当主査</p>
会議の公表	<p><input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開</p> <p><非公開・部分公開とした場合の理由></p>
傍聴者数	0 人

1 議題

- (1) 「芦屋ブランド」について
- (2) 「文化」と「経済」について
- (3) 次回について

2 懇話内容

上記の議題(1)及び(2)について、各委員の意見交換を行い、以下の点について了承・確認した。

[主な内容等]

議題(1) 芦屋ブランドについて

- ① 国際文化住宅都市としてのプランを持つべきである。
- ② 芦屋で誇れるもの、残して欲しいものは芦屋川であり、それを含む景観が最大の財産である。従って、守らなければならないし、都市計画又は景観計画が今後、芦屋の未来を決定する重要な要因となる。
- ③ 芦屋のブランドの中で一番特筆すべきは、市民がもつ美意識である。
- ④ ブランドとは自分以外の人と競争するためのひとつの技法であるので、芦屋の場合はサービス業のもつブランド戦略が、従来芦屋がもってきた文化性を象徴している。
- ⑤ 高水準にある芦屋の環境的価値と文化的価値をいかに高めていくかを考えるべきである。
- ⑥ 潜在的に豊富な人材、市民の力をどう醸成しどう生かすか、文化施設をどう生かすか、文化行政はどうあるべきかをお金をかけず、知恵と情熱をかけて考えるべきである。

議題（２）文化と経済について

- ① 文化と経済は表裏一体で、経済が文化と切り離して繁栄する時代ではもうありえない。
- ② 団塊の世代の男性を様々な形で登用して生かしていくまちにすれば、すばらしい解決になり、文化と経済の大きな両輪になる。
- ③ 経済が元気になれば、人もまちも元気になる。
- ④ 芦屋の先人達が培った洗練された知識、教養、感性は潜在能力としての文化であり、無形の資本である。これを最大限に活用することで、文化を経済に結びつける有効な道筋ができるのではないか。
- ⑤ 本当に住みやすい都市としてのランキングで常に上位にランキングされる倉敷市が良い例であるが、文化施設の立地も重要で、市の中心部に集約していることにより、市民生活が非常に豊かになる。また、全国の病院の中でも大変評価が高い病院があるなど、健康も重要かつ基本的な文化である。健康に対して先進的な取り組みをすることは、新たな芦屋の魅力づくりになる。
- ⑥ 「老人(熟年)が元気なまち芦屋」をキャッチフレーズとして実現できれば、話題性もあり有効ではないか。
- ⑦ 目先のことばかりを考えていては、有効な文化行政、文化政策はできない。未来に向けての投資事業として文化政策を行うならば、将来の経済誘発効果は十分見込めるといふ議論が必要。

議題（３）次回について

次回、10月23日（月）15時30分～17時00分で開催予定であることの連絡。

〔結論〕

全会一致で了承した。

以 上